

主論文の要約

大学時代の正課外活動と社会人生活との関連に関する研究 －「体育会系は就職に有利」という言説に着目して－

金森史枝

本論文の目的は、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして、大学の正課外活動（特に体育会系）を通して学生がどのような能力を培っているのか、また、大学時代の正課外活動の取り組みは就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのかという点を明らかにし、体育会系とそれ以外の者との比較検討から大学教育における正課外活動の意義についても検討することである。なお、本論文において「体育会系は就職に有利」という場合の「就職」については、採用段階のみならず就職後の昇進・昇格に至るまでと定義する。

序章では、本論文が大学から社会への接続問題を捉えるに当たり、「体育会系は就職に有利」という言説を分析枠組みとして用いる意義を述べた。かつては「体育会系神話」（東原，2008）という言葉に象徴されるとおり、たしかに、わが国の高度成長期を支えた時代の働き方には体育会運動部出身者がもつ体力や精神力などの特性が貢献したと考えられる。しかし、1990年代以降の経済状況等の変化に伴う企業が求める人材の変化、大学生の特性の変化、就職のあり方の変化等を経てきた現在、「体育会出身者は就職に有利」という言説はどのように把握されているのだろうか。本論文では、全国規模のインターネット調査に基づく量的研究とインタビューによって個別事例を詳細に分析する質的研究の両方法を用いた9つの研究を企画して分析及び考察を行った。

第1章では、先行研究の検討を通して、今日における体育会系の有する能力を具体的に明らかにする必要性などが見出され、以下の2つのリサーチクエスチョンを設定した。

RQ①「大学の正課外活動（特に体育会系）を通してどのような能力を培っているのか」

RQ②「大学時代の正課外活動の取り組みは就職やその後の社会人生活にどのような影響を与えているのか」

第2章では、「現役大学生の特性」を把握する目的で2つの研究を行った。まず、「研究1」では「何事もほどほどに」に重点を置いて大学生活を送る学生が漸次増加していることに着目して分析を行った。「何事も<適当>に過ごすというネガティブな学生」に加えて、「活動度が高く何事も<適度>に活動的なポジティブな学生」が相当数含まれており、「何事もほどほどに」を選択する学生には二種類の学生が併存していることを明らかにした。次に、「研究2」では、産業界が求める人材と現役大学生の特性がいかなる点で乖離しているかについて、現役大学生の特性を質的に分析した。その結果、本分析では現役大学生の半数以上が「何

事もほどほどに」に大学生生活を過ごすことについて、「ネガティブ志向＝非主体的」とカテゴリ分類された項目に該当する解釈をし、それは「主体的になれない態度」という特性として析出された。以上から、現在の一般的な大学生の有する特性を確認した。

第3章では、「現役大学生のうち体育会運動部に所属する大学生の特性」を把握する目的で3つの研究を実施した。まず、「研究3」では、体育会運動部に所属している現役大学生は、体育会運動部で週3日以上活動している者が約7割占めており、さらに、週に3日以上活動している者は、週3日未満の者と比較して忍耐力・継続力、精神力・集中力という自己力（自分自身を高める力）の獲得意識がより強いことが示唆された。次に、「研究4」では、体育会運動部の現役大学生はその活動を通してどのようなことを習得していると認識しているかについて分析した。その結果、「人間関係・上下関係・礼儀作法」「チームワーク・協調性・仲間」「体力・競技技術」「努力・忍耐力・精神力」「社会性・教養・経験」「人間形成・思考力」「主体性・リーダーシップ」「コミュニケーション力」に分類される力にまとめられた。さらに、「研究5」では、ある医師を目指す大学生Aさんに着目し、Aさんが競技としてのスポーツと学業のバランスの取り方に幾度となく悩みながら、将来の夢である医師という職業を目指して直面する課題を克服していく過程を質的に分析した。勉強との両立を図る際の葛藤とその克服を繰り返し精進していく「現代的文武両道モデル」が導出され、さらに、日々のひたむきな努力の過程から、「計画的偶発性の現出モデル」がみられた。

第4章では、「大学時代の正課外活動の違いが社会人生活にどのような影響を与えているのか」について4つの研究を実施した。まず、「研究6」では、体育会運動部と体育系サークルとの所属の違いに着目して、社会人(N=400)を対象に調査項目である「大学時代の過ごし方」20項目と「社会人である現在の意識」22項目の回答から、大学時代の体育系正課外活動への参加が社会人生活に及ぼす影響について、「所属」と「勉強との両立」による二要因分散分析を行った。その結果、所属の主効果には両群間に大きな違いはみられなかったが、体育会運動部所属者には、仕事の満足度を含む一部の項目について勉強との両立の有無で有意な差が見られ、両立者の方が高い得点を示した。また、勉強との両立の主効果として、両立者の方が忍耐力、コミュニケーション力、人間関係構築力が有意に高いことが明らかとなった。次に「研究7」では、社会人(N=600)を対象として、大学時代の正課外活動の所属を体育会運動部、体育系サークル、文化部、文化系サークルに分けて同様の分析を行った。その結果、男性では勉強と両立していた体育会運動部所属者は最高得点の項目が多かった。一方、女性では勉強と両立していた文化部や文化系サークル所属者にも得点の高い項目があり所属の違いの影響は小さかった。これらの結果から、「体育会系は就職に有利」という言説の成立には「勉強との両立」という前提条件が必要であることが示唆された。さらに、「研究8」では、大学時代の正課外活動の違い（体育会系、文化系、他の取り組みをしていた、何もしていなかった、の4区分）が社会人生活における仕事の充実度やワークライフバランスにどのような影響を及ぼすのか、また、現在のスポーツ実施状況の有無が社会人生活

とどのように関係するかという点について、社会人 (N=800)を対象に「所属」と「現在のスポーツ実施状況」による二要因分散分析を行った。その結果、まず、男性の体育会系出身者はほとんど全ての項目でトップの得点であった。このことは、「体育会系は就職に有利」という言説が、他の所属との比較において現在もなお通用することを示していると考えられる。次に、ロジスティック回帰分析の結果から、大学時代に体育会系に限らず「体を鍛えていた」ことは、「現在のスポーツ実施状況の有無」と密接に関連し、そのことがスポーツ活動を伴ったポジティブな社会人生活の実現につながっていると推察された。また、「研究9」では、幼少期から取り組んだ剣道を通して培った力が仕事にいかにか活かされたかについて、ある大企業に勤務していた男性へのインタビューデータを質的に分析して考察した。その結果、この男性は剣道で培った「観見の目付け」に代表される見る力を発揮して、従業員を観察し小さな異変を察知しており、それが社内のメンタルヘルス問題の早期発見及び適切な処置から復職支援の整備に至るまで問題解決に貢献できたと推測できた。

第5章では、上記9つの研究を通して得られた知見を基に、総合考察を行った。

男性の体育会系出身者は、社会人として有用とされる本論文で設定した自覚的能力を有している割合が高い傾向にあり、また、「体育会系は就職に有利」というには、「勉強との両立」が求められることが明らかとなった。大学の体育会運動部活動では、まず、スポーツの成績向上を目指した練習やトレーニングに取り組む努力、部内組織における人間関係の構築（特に上下関係や監督・コーチとの関係）、試合に負けた時の悔しさやケガや体の不調を克服することなどの直面する諸課題を乗り越える経験によって、社会人として活躍するための「さまざまな力」を培っている。次に、「勉強との両立」では、授業に出て定期試験や課題に向かいゼミ活動等にも参加することで専門能力を獲得し、また、両立のためのタイムマネジメントも行っている。さらに、スポーツと勉強との両立に葛藤と克服を繰り返して自己研鑽に励み人格を陶冶していると推測される。つまり、体育会系で勉強と両立していた者は、大学の正課教育とスポーツ活動を通して、さらにそれらを両立しようと努力することによって、職業キャリアの形成に必要な力を、他の活動の者と比較してより多く得ていることが考えられる。これらの力が社会人生活において日々直面するさまざまな課題に対峙するたびに、組み合わせられ融合されて課題を解決していく力に「変換」されるのではないかと推測された。

本論文で得られた知見から、大学の正課外活動は正課教育と両輪の如く多くの力を涵養する場であることを示した。そして、大学における学生支援は、学生が正課及び正課外のカリキュラムやプログラムをバランスよく学べるよう支援するという原点に立ち返ることの重要性を指摘した。そのうえで、準正課教育やキャリア教育は、産業構造や労働市場の変化を前提とした実社会で学生が活躍できるような能力開発を目指して、時代の要請に応えるカリキュラムを創造し実践することが求められており、それに向けた具体的な取り組みを提案した

終章では、本論文で得られた知見をまとめ、本論文の課題と展望を述べた。大学における正課外活動が社会人として求められる能力の形成に与える影響等を明らかにするには、本論文のみでは不十分であり多くの課題が残されている。調査分析についても対象とする年代、現在の仕事の状況など個別具体的な客観的要因を詳細に分析する必要がある。

大学の正課外活動がその後の社会人生活にどのような影響を与えるかは、大学時代の正課教育やその他の取組み、また、大学以外の環境や社会的背景により、さらに世代によっても異なるものである。しかし、時代や社会的背景が異なっても正課外活動という学生の主体的な取組みから涵養される力は、社会人となってさまざまな課題に直面した際に解決し乗り越えていく大きな力の一つとなることを本論文では複数の視点から確認した。今後わが国における労働環境はAI等の活用により大きく変化することが想定されており、テクノロジーの進化する社会の中であって学生一人ひとりが充実した職業生活を歩んでいくために潜在能力をいかに引き出していくべきか、本研究の知見を踏まえて展望を述べた。今後、大学における体育会系をはじめとする正課外活動と社会人としての活躍に必要な能力とのレリバンスに関する検討を引き続き行うことが求められる。

引用文献

束原文郎（2008）〈体育会系〉神話に関する予備的考察：〈体育会系〉と〈仕事〉に関する実証研究に向けて。札幌大学総合論叢, 26:21-34.